

出て遠い上津川と尾浦と、服役の地を替えたという。い  
ささかのんびりした次第だが、これも二人の善根による  
ものであろうか。

佐藤鶴谷の「佐伯志」によると、安政四年には入津湾  
の大庄屋は、すでに三原平兵衛となつてゐる。この事件  
による大庄屋異動の後である。

富田寛兵衛は明治六年没、戒名は普濟院大源藏道居士  
となつてゐる。今も伊勢本神社の境内に、三米余の石燈  
ろうが一對あり、父は初代大庄屋富田達左衛門、権立郎  
良孝（即ち寛兵衛）、天保二年に建てられてゐるが、これ  
を見る度には、鞆の浦での出来事か回想されてゐる。

騨の伊太郎は太男で力持ち、相撲好きとあつて、配流  
の地因尾上津川にちなんで、しこ名（四股名）を上津川と  
呼び、村の草相撲の土俵を湧かせていた話は、今もよく  
語り伝えられてゐる。

この鞆の浦の御座船の入港の轡声が

ハイリヤーリヤー ハーレバリーヤシヨイ（太鼓で獅子  
こねを繰り返したという。すでに大漁轡声の文句は、こ  
の時にはもう出来ていたものであつたまいか。

「板子一枚下は地獄」。今も昔も、海に生きる男達のき  
つぷは、ちつとも変つてない。その昔、東支那海上の八  
幡船（ははんせん）の倭寇も、この殿様御座船の話も、ま  
た一脈相通する壮快な話ではある。（おわり）

おえがき

書き終つたとこゝろに、前田課長よりの電話あり

それによると当日メカホンをもつていた秋原監督  
の添書に「文部省の特送」になつたそうので、フイ  
ルム一本町教委に寄贈される——とのこと。

書翰

年賀状に書添えて、编者宛

在大阪 顧問 矢 田 清

慶 賀 新 嬉 昭和五十年元旦

七日、歳末から新年へのお便り拝受、龍護寺の皆々様  
にも、無事御迎春と慶賀申し上げます。

当方今年を以て七十一才、但し米重利により来る二月二十四  
日を以て満七十才（中略）今をこゝろ至極佳境で、これからは一火  
で菩提池副場の情景も、片端から片づけ稼かの元気で、衣  
他事御休心有之度し。（中略）

さて三の丸櫓門も既に屋蓋瓦まで葺きあげたらしく、  
保存会の方々及び史談会員諸子の御尽力を多と致しますが、  
これで当分は大丈夫でしょう。實際全国で櫓門が完  
全に残つてゐるのは、まあ佐伯位かものでしょうか。金  
沢、名古屋、彦根、和歌山、姫路、岡山の各城でも、櫓  
門はなしです。今秋頃一度帰つて一見致しませう。

次に毎週三回青山越しの薩江まで、町史編纂のため出張とあり、  
それは即苦勞旅ですが、後世まで残るものですから、折角御尽力の程を  
お願い致します。その道中に見るい、ざりの美しさに感嘆とあ  
りまして、私と昨秋箕面の奥山で、この赤い房の雲を見かけた事  
があり、懐には赤すぎると、一体何の雲か知らんと、深審に思  
つていたのですが、これでいざりの雲と解りました。

全くもう、ニスカ蠟をかけたかのように、艶々と輝い  
ていまして、他の木の実は今頃になると、黒くくすんで  
しまします。（下略）

（編者曰く）「長田氏は小生の教えに当るので、楊舟に必要だとこ  
ろだけ書きました。この勝手、お許しを乞う。今秋も佐  
伯に帰られたら、一踏に歩きませう。」